

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 252

池新田遺跡・新屋敷遺跡

県道岡山吉井線改良工事に伴う発掘調査

2020

岡山県教育委員会

序

本書は、県道岡山吉井線改良工事に伴い実施した、池新田遺跡・新屋敷遺跡の発掘調査報告書です。

県道岡山吉井線の改良工事は、山陽町（現在の赤磐市）内の交通混雑の緩和及び交通安全の確保などを目的として計画され、現在では山陽自動車道の側道として4車線での供用が開始されているところです。

岡山県教育委員会では、この工事路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分についてやむを得ず記録保存の措置を講じることとし、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、池新田遺跡・新屋敷遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡であることが明らかになりました。この2遺跡は古代吉備中枢の一つである「上道郡」の一角を占め、周辺には、両宮山古墳、森山古墳、廻り山古墳や備前国分寺跡が存在します。また、2遺跡とも円筒埴輪が出土しており近隣古墳との関係もうかがわせるなど、この地域を考える上で重要な成果を得ることができました。

本書が地域の歴史研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に当たりましては、岡山県東備地方振興局（当時）及び地元住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

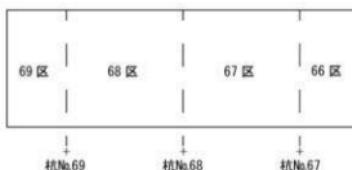
岡山県古代吉備文化財センター
所長 向井重明

例　　言

- 1 本書は、県道岡山吉井線の改良工事に伴い、岡山県教育委員会が東備地方振興局（当時）より依頼を受けて、岡山県古代吉備文化財センターが確認調査及び発掘調査を実施した池新田遺跡・新屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 池新田遺跡・新屋敷遺跡は、赤磐市穗崎（本文では、発掘調査時点の赤磐郡山陽町穗崎で統一する。）に所在する。
- 3 確認調査は、昭和59年11月から昭和60年1月にかけて、岡山県古代吉備文化財センター（文化課本務）職員 光永真一が担当して実施した。
- 4 発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員 井上 弘が担当した。発掘調査期間は、昭和63年10月11日から平成元年2月6日までである。調査面積は、池新田遺跡が2,380m²で、新屋敷遺跡が1,470m²、合計が3,850m²である。
- 5 報告書作成作業は、令和元年度に実施し、本書の編集は、岡山県古代吉備文化財センター職員 弘田和司が行った。執筆にあたっては、「岡山県埋蔵文化財報告」15 1985、「岡山県埋蔵文化財報告」16 1986、「岡山県埋蔵文化財報告」19 1989及び実績報告書の文章を参考にして弘田が担当した。遺物の写真撮影は、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 6 本遺跡の出土遺物・図面・写真は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3において保管している。

凡　　例

- 1 本書に示す高さの値は全て海拔高、方位は全て磁北である。
- 2 全体図、個別構造図、遺物実測図にはそれぞれ縮尺を表記している。
- 3 周辺の主要遺跡分布図は、国土地理院の「電子地形図25,000」を使用し、加筆したものである。
- 4 調査区は、20m間隔で打設された道路拡幅設計の基準杭を基に、東西方向に20m単位の調査区割りを行った。その際、東側の杭名をもって調査区名称とした。



- 5 本書に示す時代、時期の区分は、一般的な政治史区分による。弥生土器については、百間川遺跡群の時期区分に従う。円筒埴輪の編年については、川西編年（「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号日本考古学会 1978）を、B種ヨコハケ技法については、大阪府教育委員会「大水川改修にともなう発掘調査概要・V」1988を参考にした。

目 次

序

例言

凡例

第1章 発掘調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の体制	3
第3節 発掘調査の経過	3
第4節 報告書作成について	4
第2章 地理的・歴史的環境	6
第3章 発掘調査の成果	9
第1節 池新田遺跡	9
第2節 新屋敷遺跡	16
第3節 まとめ	28

抄録

図 目 次

第1図 確認調査の位置 (1/2,500) とトレンチ 断面 (1/60)	2	第20図 挖立柱建物3 (1/60)	19
第2図 発掘調査の範囲 (1/2,500)	5	第21図 柱穴列2 (1/60)	20
第3図 遺跡の位置 (1/200,000)	6	第22図 柱穴断面図 (1/40)	20
第4図 周辺の主要遺跡分布図	7	第23図 土坑1 (1/30)	21
池新田遺跡		第24図 土坑2 (1/30)	21
第5図 調査区土層断面 (1/60)	9	第25図 土坑3 (1/30)	22
第6図 調査区遺構配置図 (1/400)	10	第26図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	22
第7図 土坑1 (1/30)	11	第27図 土坑5 (1/30)	22
第8図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	11	第28図 土坑6 (1/30)	23
第9図 溝1断面 (1/30)	12	第29図 土坑7 (1/30)・出土遺物 (1/4)	23
第10図 溝2断面 (1/30)	12	第30図 溝1断面 (1/30)	23
第11図 溝3～5断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)	13	第31図 溝2断面 (1/30)	23
第12図 柱穴出土遺物 (1/4)	13	第32図 溝3断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)	23
第13図 包含層出土の土器 (1/4)	14	第33図 溝4・5断面 (1/30)	23
第14図 包含層出土の埴輪 (1/4)	15	第34図 溝6断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)	24
第15図 包含層出土の瓦 (1/4)	15	第35図 溝7断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)	24
新屋敷遺跡		第36図 溝8断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)	25
第16図 調査区土層断面 (1/40)	16	第37図 溝9断面 (1/30)	25
第17図 調査区遺構配置図 (1/300)	17	第38図 包含層出土の土器 (1/4)	26
第18図 挖立柱建物1・柱列1 (1/60)	18	第39図 包含層出土の埴輪 (1/4)	27
第19図 挖立柱建物2 (1/60)	19	第40図 円筒埴輪の底径と基底部高	30

図版目次

池新田遺跡

- 図版1 1 土坑2（東から）
2 土坑2、溝3・4（東から）
3 溝1（南から）

新屋敷遺跡

- 図版2 1 挖立柱建物1（西から）
2 挖立柱建物3（西から）
3 土坑1（東から）
- 図版3 1 調査区東側柱穴群（東から）

- 2 土坑4（東から）

- 3 土坑6、溝8（西から）

- 図版4 1 溝1（南から）
2 溝3～5（東から）
3 溝7（東から）

- 図版5 池新田遺跡出土土器・埴輪

- 図版6 新屋敷遺跡出土土器

- 図版7 新屋敷遺跡出土埴輪

表目次

表1 文化財保護法に係る提出書類.....	1	表3 新屋敷遺跡遺物観察表.....	32
表2 池新田遺跡遺物観察表.....	31		

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

岡山県東備地方振興局が計画する県道岡山吉井線の道路改良工事は、山陽町内の交通渋滞緩和を目的とするものである。その路線計画は同町内高月地区を中心として現代の地割に明瞭にその痕跡をとどめる条里制度構内にあるため、昭和57年3月10日付で文化財保護法第57条の3に基づく協議が通知された。計画路線は赤磐郡山陽町河本から馬屋にかけての延長2.7km間の幅22mであり、岡山県教育委員会が路線内の分布調査を実施した結果、新たに4か所の遺物散布地を確認した。これを基に昭和57年5月6日付で、工事施工前に確認調査を行い遺構を検出した場合は発掘調査を実施することで協議が整った。

確認調査は、昭和59年11月1日から昭和60年1月31日にかけて、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。総延長約1,800mの区間ににおいて、基本的には22mの道路幅の中央部に20m間隔でT1からT137までのトレーナーを設定して遺構の有無の把握と占地形の復元に努めた。その結果、確認できた4か所の遺物散布地のうち、低位部にあたる1か所を除き遺構の存在を確認したことから、小字名をとつて東側から石が坪遺跡（現在は名称未定の散布地）、新屋敷遺跡、池新田遺跡と命名した。本書

表1 文化財保護法に係る提出書類 ※文化財保護法の条文は、発掘調査時

埋蔵文化財発掘の通知（法第57条の3）

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (m)	目的	通知者	通知日	主な 勘告事項
1	教文理第83号 S57.5.6	散布地 石ヶ坪散布地、高月の条里制度構	赤磐郡山陽町馬屋 493ほか	59,730	道路	岡山県教育長 宮地暢夫	S57.3.10	確認調査

遺跡発見通知（法第57条の6）

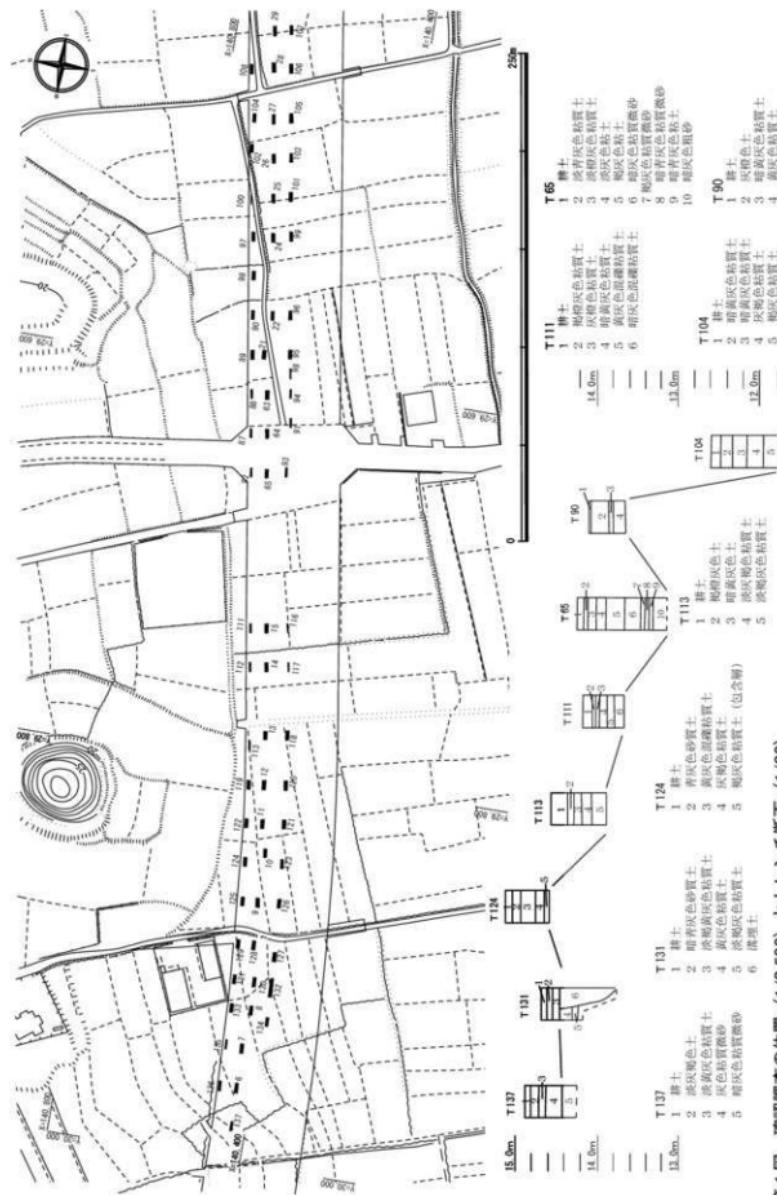
番号	文書番号 日付	遺跡の種類	所在地	発見年月日	発見の事情	発見者	出土遺物
1	教文理第87号 S60.5.4	弥生時代～ 中世の集落 新屋敷遺跡	赤磐郡山陽町 岩出861他	S59.11.8 ～60.1.23	県道岡山吉井線 改良工事に伴う 確認調査	岡山県教育長 宮地暢夫	弥生土器・土師器・須恵器1箱、 早島式土器・備前焼1箱
2	教文理第87号 S60.5.4	弥生時代～ 中世の集落 池新田遺跡	赤磐郡山陽町 馬屋582他	S59.11.8 ～60.1.23	県道岡山吉井線 改良工事に伴う 確認調査	岡山県教育長 宮地暢夫	弥生土器・土師器・須恵器1箱、 埴輪1箱、早島式土器・備前焼1箱

埋蔵文化財発掘通知（法第98条の2）

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (m)	原因	報告者	担当者	期間
1	教文理第3837号 S63.10.5	周知	集落跡 池新田遺跡	赤磐郡山陽町徳崎	2,400	道路	岡山県教育長 竹内康夫	井上 弘	S63.10.1 ～H1.2.5

遺物発見通知（法第100条の2）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	保管場所
1	教文理第217号 H14.11	弥生土器・埴輪・ 須恵器・中世土器等 整理箱2箱	赤磐郡山陽町徳崎 池新田遺跡・新屋敷遺跡	S63.10.5 ～H1.2.6	岡山県教育長 竹内康夫	岡山県知事 長野土郎	岡山県古代吉備 文化財センター



に収載する新屋敷遺跡では、基盤層上面において弥生から古墳時代の溝1条と時期不詳の溝・柱穴を検出し、一部で溝・柱穴のものの中世の遺構面を確認している。池新田遺跡においては、弥生時代後期の土坑と古墳時代から古代にかけてとみられる溝を検出している。遺物としては、弥生時代中期をさかのぼるのではなく、客土中からの埴輪片出土が目立った。

なお、本書には未収載であるが、石が坪遺跡の発掘調査必要範囲は、道路工事実施に際しての進入路にあたるため確認調査終了後、直ちに発掘調査を実施している。

第2節 発掘調査の体制

昭和59年度		文化課	
岡山県教育委員会		課長	吉尾 啓介
教育長	宮地 幹夫	課長代理	河野 衛
教育次長	横野 昭輝	課長補佐	伊藤 晃
教育次長	肥塚 稔	主査	藤川 洋二
文化課		岡山県古代吉備文化財センター	
課長	松元 昭憲	所長	水田 稔
課長代理	吉本 唯弘	〈総務課〉	
課長補佐	河本 清	課長	佐々木 清
主査	遠藤 勇次	総務主幹	藤本 信康
文化財保護主事	光永 真一 (調査担当)	主任	花本 静夫
		主任	岡田 祥司
昭和63年度		主任	片山 淳司
岡山県教育委員会		〈調査第一課〉	
教育長	宮地 幹夫	課長	河本 清
教育次長	石井 雄信	課長補佐	井上 弘
教育次長	竹内 康夫		(調査担当)

第3節 発掘調査の経過

山陽町内の交通混雑の緩和及び交通安全の確保などを目的として、岡山県土木部東備振興局が計画する主要地方道岡山吉井線の改良工事に伴い、昭和63年10月11日から平成元年1月末の予定で、担当調査員1名が専従して発掘調査を実施した。発掘調査の範囲については、昭和59年度に実施した確認調査により確定しており、森山古墳と廻り山古墳の付近では県道の計画線はほぼ東西方向となっており、東西方向に約680m、道路幅22mを対象とし、総面積が3,850m²となった。

池新田遺跡は、森山古墳周溝の南にあたり、古墳を中心に東西約280mの範囲となり、その中では東側が最も低く、森山古墳の南側が最も高く、西端へと低くなる。検出した遺構には土坑、溝、柱穴がある。土坑は、出土遺物から古墳時代前半と考えられ、柱穴はそのほとんどが中世とみられる。

新屋敷遺跡は、廻り山古墳の南に位置し、東西約160mの間を調査した。遺構はほぼ全体に検出し

た。検出した遺構には、土坑、溝、柱穴などがある。東端付近で多くの柱穴を検出し、建物1棟を確認した。東半部において検出した柱穴、溝などは弥生時代中期後半と考えている。そのほかに中世から近世にかけての土坑、柱穴を確認した。出土遺物には弥生土器、埴輪、備前焼や中世の土師質土器がある。

第4節 報告書作成について

昭和63年から本格化した山陽自動車道建設に伴う津寺遺跡ほか（岡山ジャンクションとその周辺部分）の発掘調査や岡山県立大学建設に伴う南溝手遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡などの発掘調査は、当時の岡山県教育委員会にとって最優先にすべき課題であり、可能な限りの調査員数を投入する必要があった。そのような状況の下で、池新田遺跡・新屋敷遺跡の発掘調査報告書の作成作業はやむなく延期せざるを得なかった。

発掘調査報告書の未刊行については、本書に限らず岡山県古代吉備文化財センターの大きな課題として残ったが、職員配置等の問題から十分な整理期間と作業の体制がとれなかつた。そこで、本書同様に報告書が未刊行となった他遺跡とともに、調査担当者や調査第一課を中心として少しづつ整理作業を進めてきた。平成18年度には、池新田遺跡・新屋敷遺跡の発掘調査担当者である井上弘が図面整理、遺構図の浄書を中心に行つた。平成19年度には、弘田和司が遺物実測と浄書を中心に実施したが、今日まで刊行には至らなかつた。

令和元（平成31）年度には、未刊行報告書の作成について本格的に取り組むこととなり、弘田が本書の作成を担当することとなつた。図面・写真類の再整理を実施し、遺構実測図、遺物実測図の浄書や遺物写真撮影を終えて、編集作業、原稿執筆を行い、令和2年3月には本書刊行の運びとなつた。

令和元年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 高見 英樹

文化財課

課長 大西 治郎

参事（文化財保存・活用担当）

横山 定

総括副参事（埋蔵文化財班長） 柴田 英樹

主幹 河合 忍

主任 原 珠見

岡山県古代吉備文化財センター

所長 向井 重明

次長（総務課長事務取扱） 佐々木雅之

参事（文化財保護担当） 大橋 雅也

（総務課） 総括主幹（総務班長） 甲元 秀和

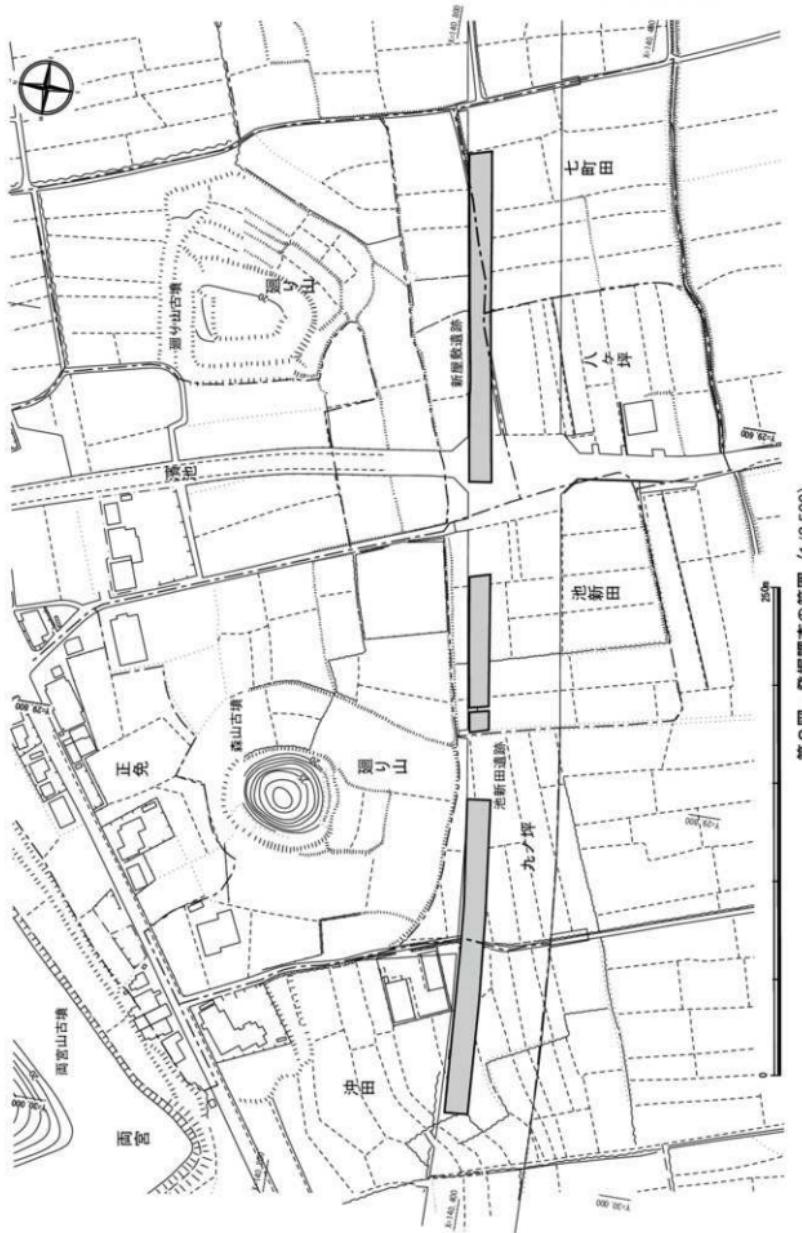
主任 東 恵子

主任 多賀 克仁

（調査第三課）

課長 弘田 和司

（報告書作成担当）



第2図 発掘調査の範囲 (1/2,500)

第2章 地理的・歴史的環境

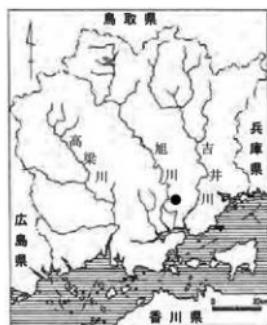
赤磐市は、平成17（2005）年3月7日、山陽町・赤坂町・熊山町・吉井町の四町の合併により市制が施行された。池新田遺跡・新屋敷遺跡が所在するのはそのうちの旧山陽町であり、赤磐市域の南西部を占める。旧町域は、ほぼ中央を中規模河川である砂川が南北に流走し、その周囲を標高200～300m級の山塊が取り囲んでいる。旧山陽町内では、1970年代始め頃から開発・造成された山陽団地を皮切りに、岡山市のベッドタウンとしての開発と人口増が顕著となったほか、旧山陽町域を東西に延びる山陽自動車道の存在など環境の変化が著しい。

この地域の多くの遺跡は、砂川に沿って拡がる東西約5.5km、南北約6.3kmの平野や平野に面した丘陵部の緩斜面や裾部に位置しており、発掘調査が行われたものも少なくない。なかでも池新田遺跡・新屋敷遺跡が位置する平野西部は、巨大前方後円墳である両宮山古墳や国分寺跡など吉備地域全体を見渡しても重要な遺跡が集中している。

この地域に人々が暮らし始めたのは、縄文時代の後期以降と思われる。斎富遺跡では、遺構は確認できなかったものの、後期の土器片が出土している。南方前池遺跡では、ドングリ類を貯蔵した縄文時代晩期の貯蔵穴が調査されている。

弥生時代に入ると次第に遺跡数が増加してゆき、集落の様相も明らかとなる。ただし、前期段階ではまだ遺跡数も少なく、南方前池遺跡や山陽小学校遺跡において土器片が出土するに過ぎない。中期中葉から後期初頭にかけての遺跡は、用木山遺跡・門前池遺跡など丘陵上や斜面に立地する。用木山遺跡では、竪穴住居や段状遺構が124軒、高床式住居2棟、貯蔵穴20基が存在しており、この地域の撲点的な集落といえる。門前池遺跡では、竪穴住居以外に貯蔵穴も多く、遺物としては銅鋌形土製品も出土している。後期に入ると斎富遺跡など遺跡の立地が平野部や丘陵裾、谷口へも拡がってゆく。平野部での様相はまだ不明な点が多いものの、新屋敷遺跡において竪穴住居や土坑が調査されている。また、四辻土坑墓群や便木山遺跡などの墳墓遺跡も数多く存在しており、方形台状墓や土坑墓群が調査されている。

古墳時代では、二重周溝を持ち、備前國最大で全長約200mの前方後円墳、両宮山古墳が著名である。この両宮山古墳を中心に、前方後円墳の廻り山古墳・帆立貝形古墳の和田茶臼山古墳・森山古墳が周囲を取り囲むように古墳群を形成する。和田茶臼山古墳は全長55m、二重周溝を廻らせるが両宮山古墳と同様、埴輪・葺石を持たない。両宮山古墳の時期は、墳形を手がかりにすると、吉備では作山古墳に後出する大首長墓と考えられる。森山古墳は、全長85m、二段築成の帆立貝形古墳で、周溝を廻らせる。埴輪・葺石が確認できており、5世紀後半の時期が考えられる。森山古墳の北には、直径23mの円墳、正免東古墳があり、周溝内において葺石と埴輪が確認されている。さらに平野南の丘陵裾には朱牛馬古墳や小山古墳といった古墳が



第3図 遺跡の位置 (1/200,000)



- 1 池新田遺跡
 2 新屋敷遺跡
 3 善応寺城跡
 4 四辻土坑墓遺跡・峠方形台状墓
 　・峠古墳群
 5 便木山遺跡・便木山方形台状墓
 　・便木山古墳群
 6 門前池西方遺跡
 7 門前池東方遺跡
 8 用木古墳群

- 9 宮山方形台状墓・宮山古墳群
 10 横岡遺跡
 11 岩田古墳群
 12 用木山遺跡
 13 爰宕山遺跡・愛宕山土坑墓群
 　・愛宕山古墳群
 14 別所古墳群
 15 斎富古墳群
 16 斎富遺跡
 17 南方前池遺跡

- 18 着銅遺跡
 19 山の間遺跡
 20 和田茶臼山古墳
 21 両宮山古墳
 22 正面東古墳
 23 勾り山古墳
 24 森山古墳
 25 備前国分寺跡
 26 馬屋遺跡
 27 備前国分尼寺跡

- 28 朱千駄古墳
 29 小山古墳
 30 丸古墳群
 31 玉井丸山古墳
 32 大廻小廻山城跡

第4図 周辺の主要遺跡分布図

埋蔵文化財包蔵地の範囲は、おかやま全県統合型G I S（平成31年4月段階）を参照にした。

存在する。朱千駄古墳は、全長65m、二段築成の前方後円墳で、発掘調査により埴輪や須恵器が出土しているほか、竜山石の長持形石棺が岡山県立博物館において屋外展示されている。小山古墳は、全長53m、二段築成の前方後円墳で、の阿蘇溶結凝灰岩製の家形石棺が露出している。ともに森山古墳に後出し、中期末から後期前葉にかけての首長墳と考えられる。廻り山古墳は、前方部が発達する形状からこの地域最後の前方後円墳とみられるが詳細は不明である。後期に入ると、斎富古墳群や岩田古墳群などの群集墳が形成される。斎富古墳群は、丘陵上に立地する直径8mほどから十数mの円墳群である。埋葬施設は、小型の木棺直葬・豊穴式石室・横穴式石室墳へと、6世紀中葉以降、7世紀初頭の追葬が確認できる変遷がたどれる。岩田古墳群中の14号墳では、全長約11.8m、玄室長5.5mの片袖式石室内から、環頭大刀や金銅装馬具が出土している。集落遺跡としては、着銅遺跡や山の間遺跡といった5世紀後半～6世紀後半にかけて丘陵斜面に小規模集落が展開する。平野東部の斎富遺跡においても、前期から後期（6世紀後半）にかけての豊穴住居が多数検出されており、7世紀には掘立柱建物へと転換するようである。中期後半以降の遺構からは、朝鮮半島系の遺物も数多く出土している。

奈良時代には、両宮山古墳の西側に隣接して備前国分寺跡、その南側に備前国分尼寺跡が造営される。国分寺跡の寺域は、東西175m・南北190mで、築地塀をもって区画する。主要伽藍として南門・中門・金堂・講堂・僧房が南から一直線に配されるとともに、寺域南東隅には塔が配される東大寺式伽藍配置（国分寺式伽藍配置）である。平安時代中頃から後半頃（10世紀代）に改修が実施されたのち、平安時代末頃（12世紀中頃-後半頃）には講堂および北側回廊が焼失したものと見られる。

古代山陽道は、赤磐市可真から日吉本峠を越えて岡山市北区牛佐へ向け国分寺跡の南を東西に通っていた可能性が高い。馬屋森向遺跡では、平安時代以前の古道と推測される遺構が検出され、平城宮式の1点を除くすべての軒丸瓦が備前国分寺の創建瓦と同文であり、高月駿家の可能性が高い。また、整然とした建物配置や方形に区画する溝を検出した馬屋遺跡、斎富遺跡も公的施設や豪族居宅の可能性がある。さらに、門前池遺跡では、奈良時代の建物と白鳳期の瓦が出土しており古代寺院や官衙の可能性がある。岡山市東区瀬戸町との境をなす独立丘陵上に古代山城である大廻小廻山城跡がある。鬼ノ城とともに日本書記に記述はない。38ヘクタールの城域に二つの峰と三つの谷を取り込むように石壁と土壁からなる城壁がめぐる。出土遺物から、白鳳時代から奈良時代初頭にかけて機能していたと考えられるが築城の時期は判然としない。

この地域にも高月条里、西山高陽条里といった条里整地割りが残っている。高月条里地内である今回の発掘調査においても、それに関連する遺構は確認できず、その施工時期は判然としない。

中世の集落は、馬屋遺跡や斎富遺跡で確認できる。斎富遺跡は鎌倉時代の集落で掘立柱建物を数多く検出している。馬屋遺跡は備前国分寺の門前にあたり、平安時代末から室町時代前半を中心とした長期にわたって集落が継続する。中世山城としては、善應寺山から南東に派生した標高約150mの尾根頂部に位置する。6か所の曲輪と切岸以外に堀切などは存在しない。築城時期や城主に関する史料を欠く小規模な城郭である。

参考文献

『両宮山古墳』2 赤磐市教育委員会 2018年

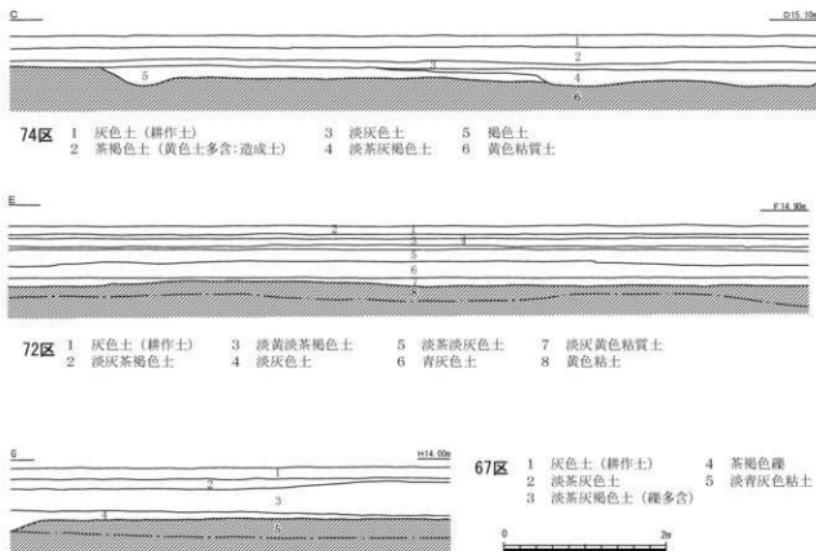
第3章 発掘調査の成果

第1節 池新田遺跡

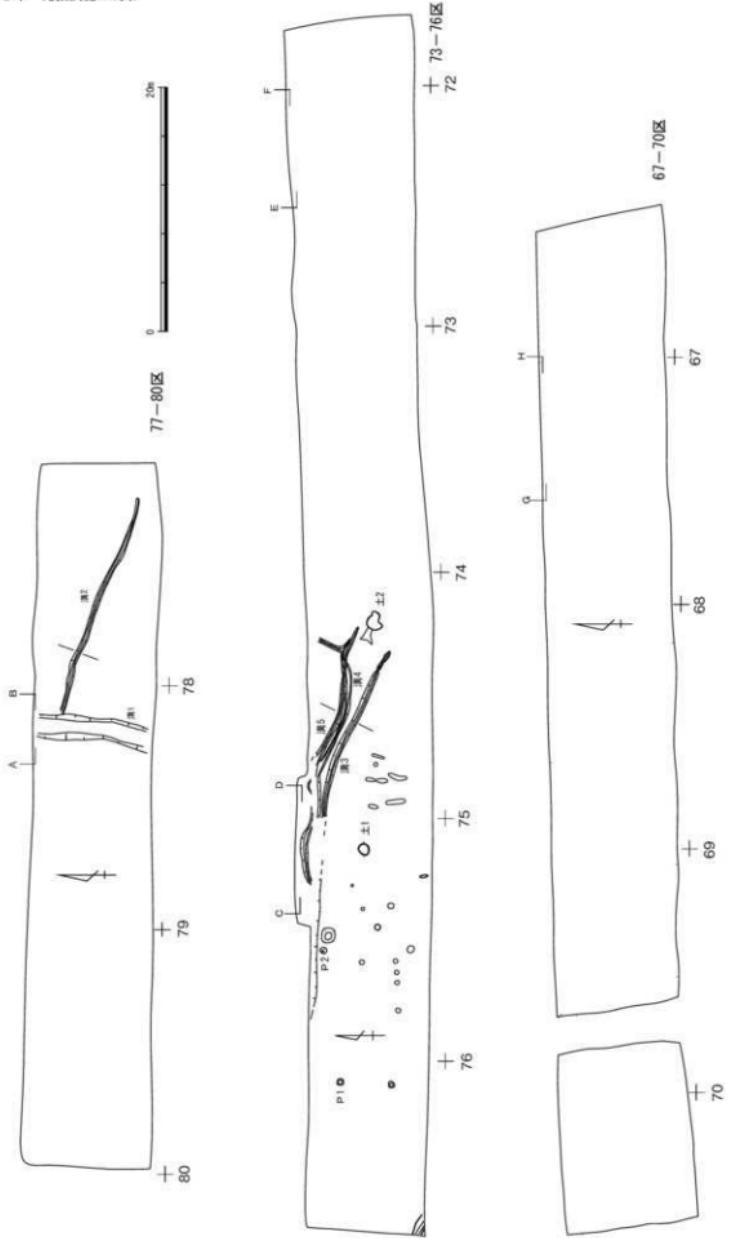
1 概要

池新田遺跡は、両群山古墳や森山古墳が位置する丘陵部の先端に当たり、森山古墳周囲すぐ南に接して所在している。おかやま全県統合型G I Sに掲げる包蔵地の範囲は、東西に280m、南北が55m程度と東西に細長い形状をなす。今回の調査地の南側において、本県が実施した山陽自動車道や赤磐市教委による圃場整備に伴う発掘調査ないしは確認調査が行われており、山陽自動車道調査区においてわずかな遺構と遺物を確認しているものの、赤磐市教委による圃場整備確認調査のトレンチでは遺構、遺物とも確認できなかったことから、遺跡の南限は山陽自動車道部分にあると推定できる。一方、丘陵の上方に当たる調査地北側は、森山古墳の下層へと遺跡が拡がる可能性がある。

杭66~80までの約280m間を調査した。地形的には森山古墳から南へと傾斜しており、調査区内では、古墳に接する付近(73~78[区])が最も高く、東西方向へとそれぞれに傾斜する。地形的に最も高



第5図 調査区土層断面 (1/60)



第6図 調査区遺構配置図 (1/400)

いところでは、表土直下約40cmで遺構を検出している。67区では、3・4層から中世の土器が出土している（第5図）。72区では、6層から埴輪片が出土している。66～74区では、70cm～1mで地山を検出したが、地山面では遺構は確認できなかった。72区では、淡黄灰色土（6層）から埴輪が、地山直上において中世の遺物とともに円筒埴輪片が出土しており、中世以降に水田化されていったものと推定される。

遺構を検出したのは、74～78区で、土坑が2基、溝が4条、柱穴が十数基程度である。

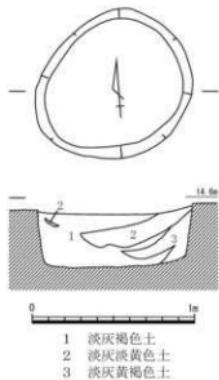
2 土坑

土坑1（第6・7図）

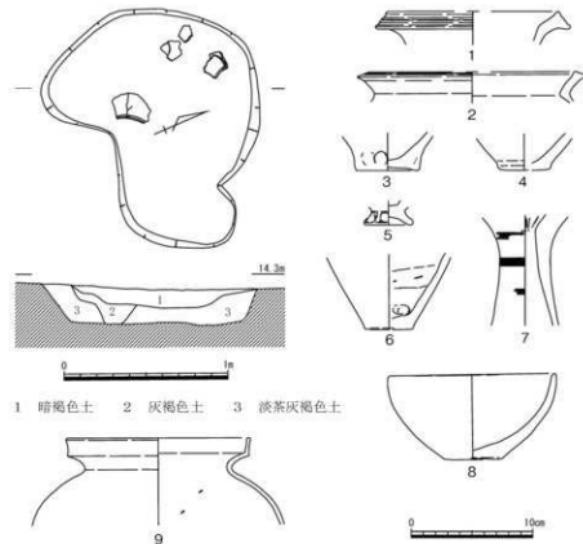
75区で検出した土坑である。平面形はややいびつな円形を呈する。底面は平坦で、底面高は14.59m、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長径は100cm、短径が80cmで、深さは35cmを測る。出土遺物はみられなかつたが、埋土の色調から判断して、この土坑の時期は中世以降と考えられる。埋土はブロック状に堆積しており、意図的に埋め戻されたと考えられる。機能、用途は不明である。

土坑2（第6・8図、図版1）

74区で検出した土坑である。平面形はややいびつな隅丸長方形を



第7図 土坑1 (1/30)



第8図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は、長径が145cm、短径は140cmで、深さは23cmである。底面は平坦な面をなしており、海拔高は14.0mを測る。出土遺物には、弥生土器と土師器がある。壺・甕の口縁部片1・2、底部片3・4、製塙土器脚部片6、高杯脚部片7、鉢8と土師器甕の口縁から体部上半にかけての9がある。

土坑の時期は、弥生土器が混入と考えて古墳時代前期としておく。

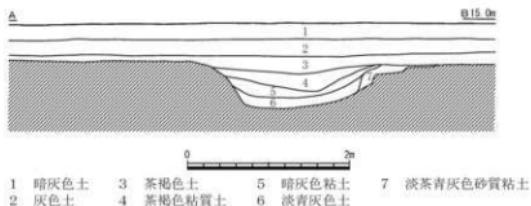
3 溝

溝1（第6・9図、図版1）

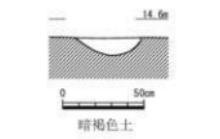
78区で検出した溝で、溝2を切る。調査区北半部ではほぼ南北方向であるが、南半ではやや南西方向に流れが変わっている。規模は、上面での幅が約2mを測り、深さは50cm余りである。溝の時期を決定する遺物に乏しいが、古墳時代前期の溝2を切っていること、円筒埴輪が出土していること、中世と思われる2層の堆積時には完全に埋没していること及び、出土した埴輪は川西編年IV期で森山古墳からの流入とみると、溝の時期は古墳時代中期から古代の間に想定できよう。なお、出土した埴輪については、包含層出土埴輪との判別が困難となっていたため、その他の遺構・遺物の項で包含層出土埴輪と併せて記述する。

溝2（第6・10図）

77・78区で検出した。北西から南東方向に流れる溝で西側では溝1に切られ、溝1の東側では長さ19mにわたって検出したものの徐々に浅くなり77-80区の南東で途切れる。規模は、幅が約40cm、深さは約10cmである。出土遺物はみられなかったものの、土坑1と同様の埋土で埋没していることから古墳時代前期と考えておきたい。



第9図 溝1断面（1/30）



第10図 溝2断面（1/30）

溝3～5（第6・11図、図版1）

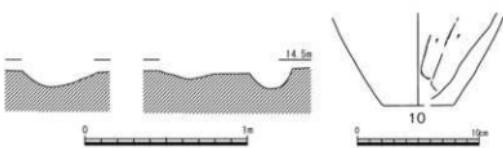
74・75区で検出した溝群で、3条の溝が切り合っている。幅は溝3が約45cmほど、溝4・5は20～40cm程度で、深さはいずれも数cmから10cm程度である。74区土層（第5図）における5層が溝4の埋土、4層が溝5の埋土であり、切り合い関係から溝4よりも溝5が新しいことが判明した。溝3と4の切り合いはすでに掘削されていた確認調査のトレンチによって不明確であるが、トレンチ出土の遺物が溝4の遺物と同一個体であったことから溝3を溝4が切るとみてよい。つまり、南側の溝3が古く、北に向かって溝4・5へと新しくなると考えられる。溝4の埋土からは底部片10や図示し得なかったが、弥生時代中期後葉の土器が出土しており、溝の時期を示すものと考えている。この溝群は

百間川遺跡群の微高地縁辺部にみられる溝状遺構群と同様で微高地開墾の痕跡とみられる。つまり、水田域である南側の低位部から丘陵裾に向かって地形に即して順次、削り込んだ痕跡と考える。

4 柱穴（第6図）

柱穴は、14本を確認したが、建物としてのまとまりはない。76区で検出したP1は直径50cm、深さ30cmほどの円形のビットである。埋土中からは、弥生土器壺の口縁部片11・12、底部片13が出土しており、時期は弥生時代後期Iのビットと考えている。P2は、直径52cmほどの円形のビットであるが、深さが13cmと浅い。埋土中からは土師質高台付椀14・15が出土している。口径が11.2・11.4cm、器高3.75・3.1cmである。時期は13世紀末～14世紀初頭頃と考えられる。

そのほかの柱穴の多くは、埋土が灰色もしくは淡黄灰色で埋没していることから、時期は中世以降と考えている。



第11図 溝3～5断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第12図 柱穴出土遺物 (1/4)

5 包含層出土の遺物（第13～15図）

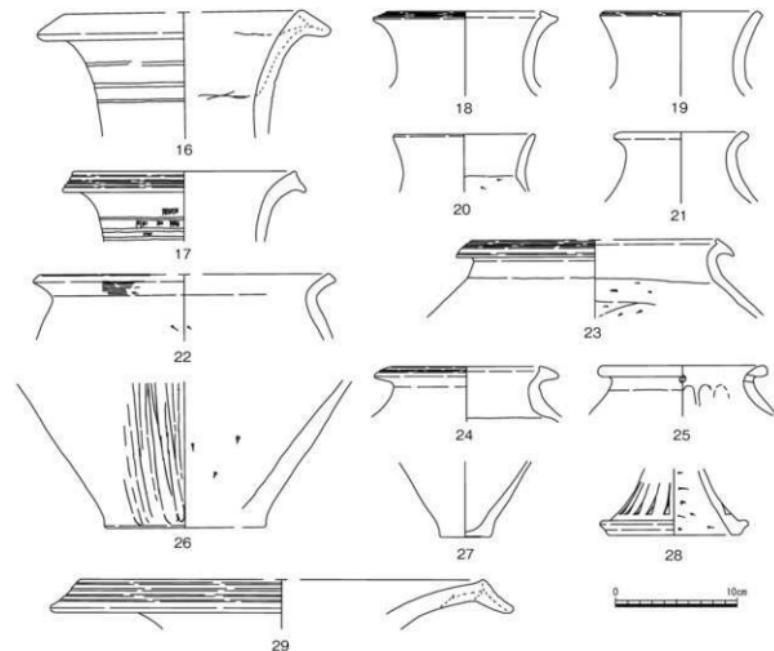
遺構に伴わない遺物として、弥生土器、埴輪、土師質土器、瓦がある。

16～29は弥生土器である。16・17は長頸壺、18～21は短頸広口壺で、17～19には口縁端部に凹線がみられる。壺には、口縁部を「くの字」に折り曲げただけの22と口縁端部を拡張させ凹線巡らせる23・24がある。25は鉢の口縁部で、頸部に穿孔がみられる。26・27は壺の底部片で、26では外面にヘラミガキが看取できる。このほかに高杯の脚部28や器台の口縁部29がある。いずれも時期は後期Iであり、集落の時期を反映する。

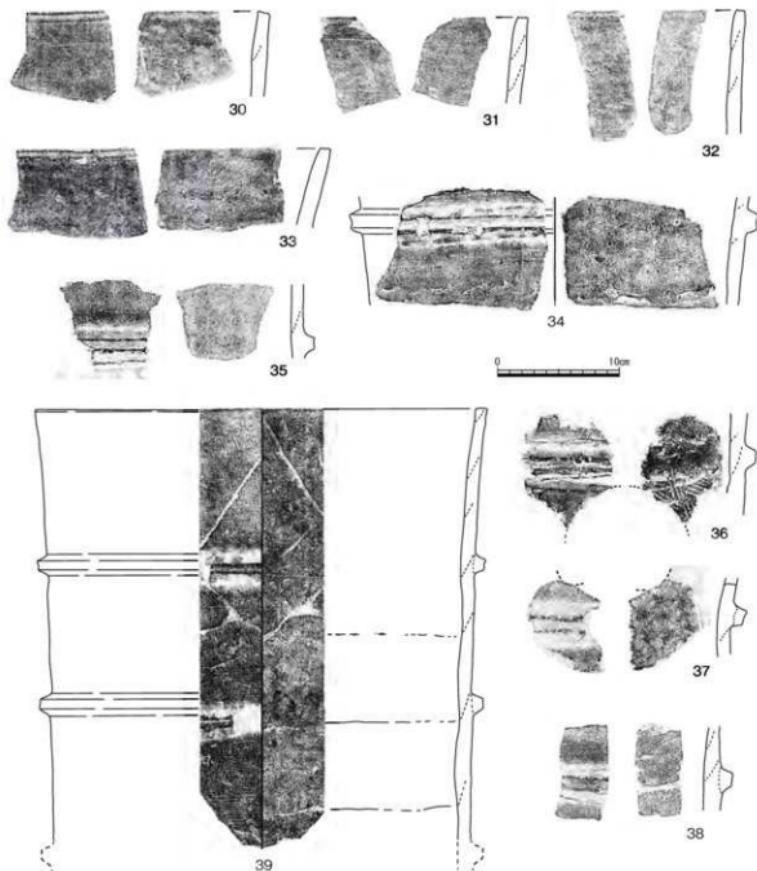
20～39は円筒埴輪片である。焼成は良好でいずれも須恵器質を呈し、胎土中には0.5～2mm程の白色砂粒を多く含む。包含層出土以外に溝1出土のものも含まれる可能性が高いが、整理の前段階で混同して分離が不可能であった。これらの埴輪は本来、森山古墳の埴輪に樹立されていたものが流れ込んだと考えられる。30～33は口縁部の破片で、30は内外面ともにナデで仕上げるが、それ以外は外面にナメ方向のハケが残る。30・32はハケの単位が12本/cmと非常に細かいが、31・33は9本/cmであ

る。35では、上下方向に2条の沈線を施すヘラ記号がある。ハケの単位は15・16本/cmと非常に細い。34は残存部径が32.0cmである。外面のB種ヨコハケは休止痕が明瞭で、工具の幅は4cm程度である。37には円形の透かし孔がみられる。内面調整はナデが主であるが、31・33~35のようにヨコハケを施すものもある。これらのうち最も残りがよい39は口縁部の約1/4が残存し、口径が36.8cmで、残存高は35.0cmである。突帯は比較的高い台形で2条が残存するが、下段の突帯が2.2cmに対し上の突帯幅が1.7cmとやや細い。さらに残存下部に突帯成形時のナデが残ることから、最低で3条の突帯の存在が明らかである。この最下段突帯も丁寧な横ナデで成形された通常の突帯である。これが3条4段の製品とすると、最下段の突帯は押圧技法ではない。森山古墳の埴輪には押圧技法のあるものとないものの両者の存在が知られており、4条突帯5段の製品の可能性もある。下段の突帯の剥離部分には突帯削り付けの際の沈潜が残る。外面には幅3cm程度の工具でB d種ヨコハケを粗く施しており、1次調整のタテハケが良く看取できる。内面は全体が丁寧にナデで仕上げられるが、粘土ひもの積み上げ痕も明瞭に残る。

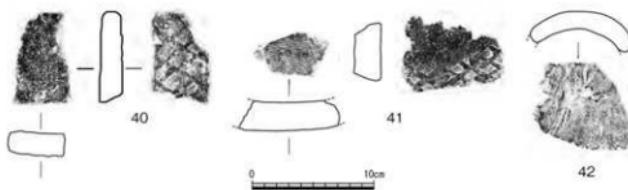
40~43は古代の瓦類である。40・41は平瓦片である。40は端面の一部が残る破片である。ともに凸面に荒い斜格子のタタキが、凹面には布目痕が残る。42は丸瓦片で、凹面に布目痕が残る。瓦類はいずれも摩滅が著しく、近在する国分寺や国分尼寺などから持ち込まれてきたと考えられる。



第13図 包含層出土の土器 (1/4)



第14図 包含層出土の埴輪（1/4）



第15図 包含層出土の瓦（1/4）

第2節 新屋敷遺跡

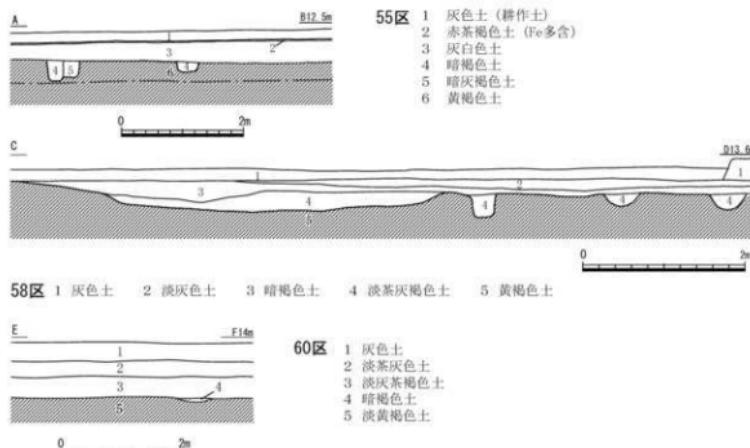
1 概要

全長60mの前方後円墳である廻り山古墳の南側に位置し、同古墳が築かれた丘陵の裾部にあたる。現状での包蔵地の範囲は、東西方向に225m、南北が60mほどで、池新田遺跡と同様、東西に細長い形状を呈している。池新田遺跡とは直線距離にしてわずかに80m弱しかなく、両者の間には浅い谷に入っていたものの、本来は一つの集落であった可能性が高い。また、今回の調査地南側では、山陽自動車道建設に伴う発掘調査にあたり、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけての竪穴住居1軒、土坑8基、溝などを調査しており、弥生土器のほか石器が出土しているが、今回の調査で多くみられた埴輪類は出土していない。一方で本遺跡の北側は、丘陵上方にあたる廻り山古墳の下層まで包蔵地が拡がる可能性がある。地形的には、東西方向でみると61・62区付近が最も高く、そこから両側へと緩やかな傾斜を持つ。南北方向では、北から南へと傾斜する。

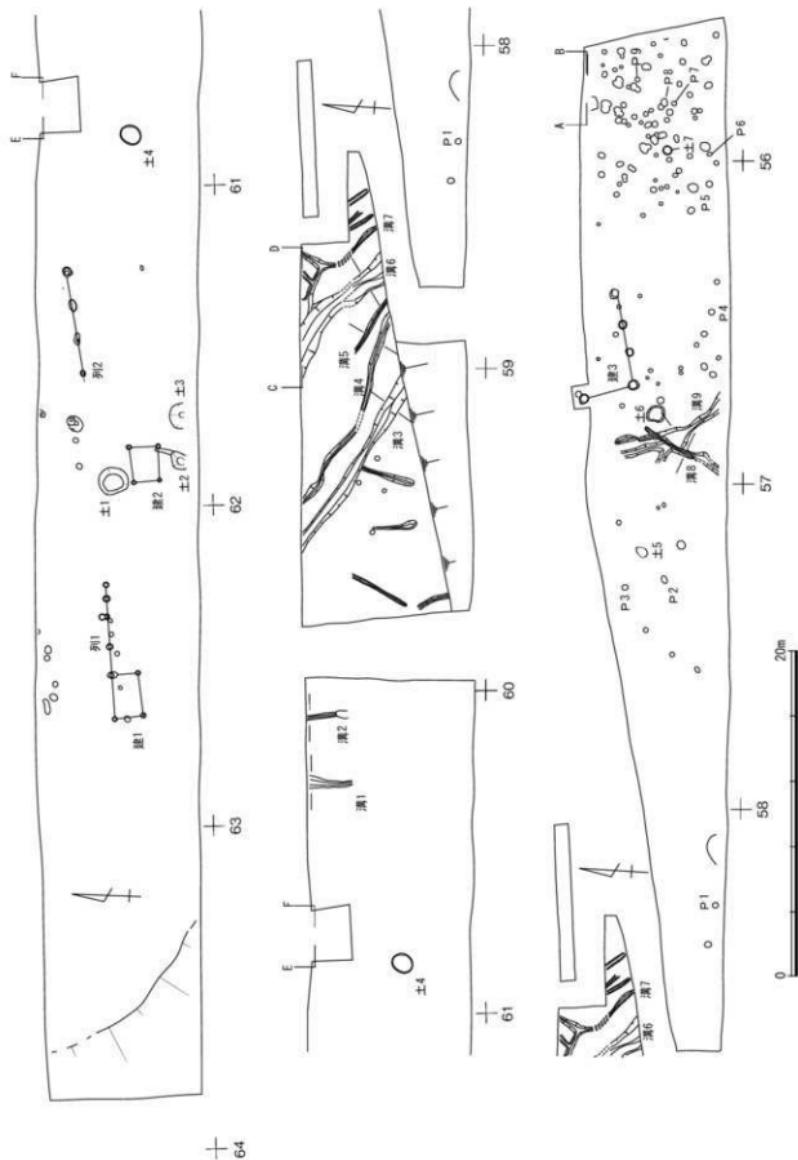
調査は、池新田遺跡と同様、20m間隔に打設された道路建設用の基準杭を基にして調査区を設定しており、そのうちの55区から64区までの約170m間の発掘調査を行った。

調査の結果、遺構は調査範囲のほぼ全域で検出したが、東半部が多く、西側（池新田遺跡側）で少ないという傾向がみられた。これは、後年次に発掘調査を行った山陽自動車道の調査区においても同様の傾向を示している。

遺構の検出面は、地山とみられる黄褐色土の上面であり、表土下からは30~50cmの深さである。遺跡の時期は、弥生時代後期と中世以降が主で、検出した遺構には、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴などがある。出土した遺物は、弥生土器と埴輪を中心で、備前焼や陶磁器も出土している。



第16図 調査区土層断面 (1/40)

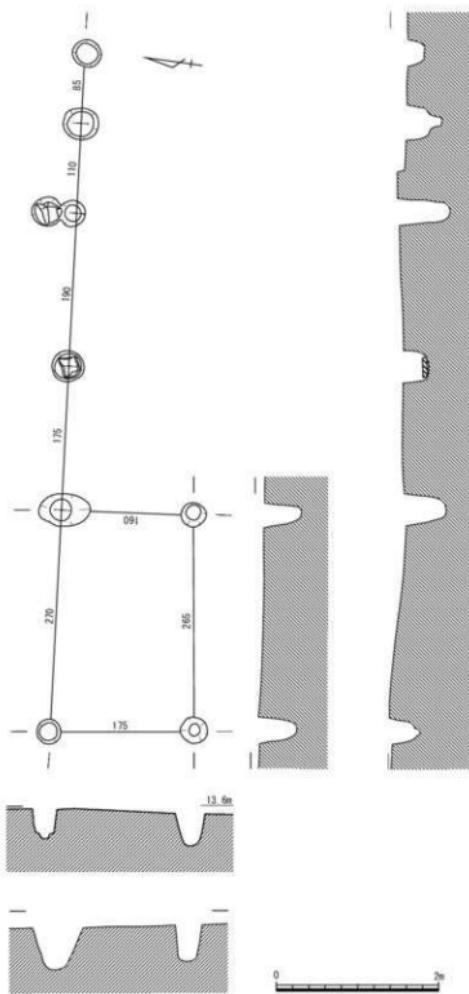


第17図 調査区地構配図 (1/300)

2 挖立柱建物・柱穴列・柱穴

掘立柱建物 1・柱列 1 (第17・18図、図版2)

62区に位置する 1×1 間の建物と北側の桁行から東に延びる柱列である。建物主軸は N84° E であ



第18図 挖立柱建物 1・柱列 1 (1/60)

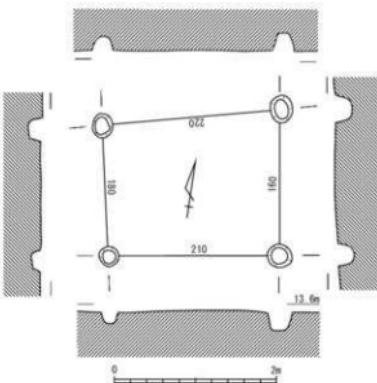
る。柱穴の平面プランは、いずれも円形で、埋土は淡黄色（P 2・5・8）と灰色（P 1・3・4・6・7）の二種があるが、この建物と柱列以外に周囲には柱穴は少ないと、根石が存在する柱穴があることから、整理の際に建物及び柱列として図上で復元したものである。

掘立柱建物2（第17・19図）

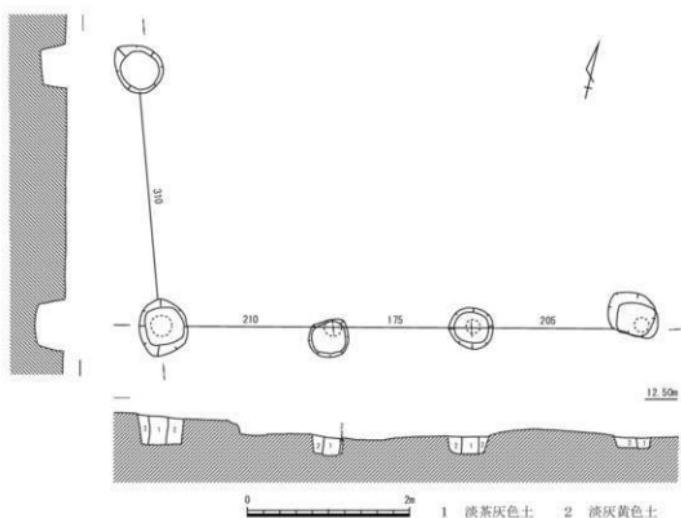
61区に位置する 1×1 間の建物である。この建物を構成する4本の柱穴以外に、周辺に柱穴が希薄であったことから、整理の過程で図上復元を行った建物である。柱穴は平面形が円形を呈し、直径が23~33cm、深さは10~23cmほどである。建物の棟方向はN 81° E、床面積は3.7m²と小規模である。柱穴からの出土遺物はないが、埋土は淡黄色土で埋まっていることから、この建物時期は中世以降と考えられる。

掘立柱建物3（第17・20図、図版2）

56区の調査区北壁沿いで検出した。桁行3間で、梁間は1間までを確認している。規模は、桁行6mで、梁間は3.2m以上と考えられる。断面を確認した柱穴は、いずれも柱痕跡



第19図 掘立柱建物2 (1/60)

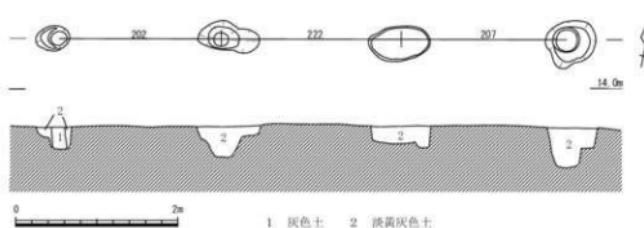


第20図 掘立柱建物3 (1/60)

が明瞭に残る。また、平面形は歪な円形ないしは隅丸方形を呈し、長径で50~65cm、短径で45~55cm、深さは15~35cmほどである。この建物を1×3間の建物と復元すると床面積およそ18m²となり、棟方向はN77°Eである。柱穴からの出土遺物はないものの、柱穴埋土の色調からみて、この建物の時期は中世と考えられる。

柱穴列2（第17・21図）

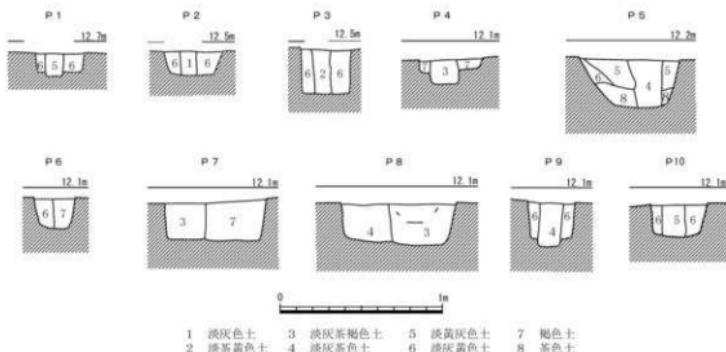
61区で確認した柱穴4本からなる柱列で、柱間3間分を確認している。規模は、長さが623cmで、棟方向がN78°Eと掘立柱建物3の棟方向とほぼ同一である。柱穴は平面形が円形ないしは梢円形を呈し、長径が44~75cm、短径は34~54cmで、深さは26~48cmの幅がある。柱穴埋土の色調からみて、時期は中世以降と考えられる。



第21図 柱穴列2 (1/60)

その他の柱穴（第17・22図、図版3）

建物3の東、55・56区において多数の柱穴が集中していた。柱穴の直径が30~50cmを測り、柱痕跡や抜き取り痕跡も明瞭に残るが、建物としてまとめるることはできなかった。埋土の色調から古代以前に遡る柱穴も存在するとみられる。調査区全体で検出した柱穴の大半は、埋土が灰色もしくは淡黄灰色であり、時期は中世以降と考えられる。



第22図 柱穴断面図 (1/40)

3 土坑

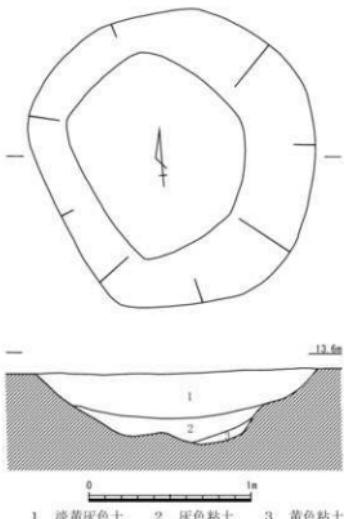
土坑1（第17・23図、図版2）

61区に所在する。平面形がやや歪な長円形を呈し、規模は長軸が180cm、短軸が168cm、深さは44cmである。底面は凹凸があり、レベルは13.05mである。出土遺物はみられないが、埋土の色調から判断して、時期は中世以降と考えられる。

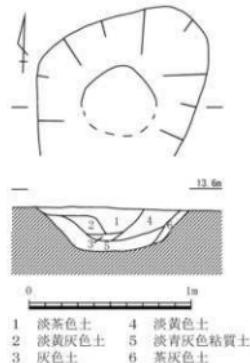
土坑2（第17・24図）

61区の調査区南端にあり、土坑の南側は調査区外にのびる。平面形が卵形を呈し、残存部の規模は、

120×100cmほど、深さが27cmである。底面はほぼ平坦で底面の海拔高は13.22mであった。顯著な出土遺物はみられなかったが、埋土の色調から判断してこの土坑の時期は、中世以降と考える。



第23図 土坑1 (1/30)



第24図 土坑2 (1/30)

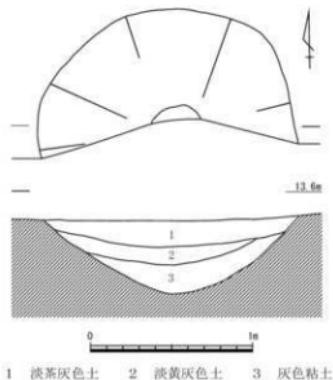
土坑3（第17・25図）

土坑2の東1mの所に位置しており、土坑の南側は調査区外へと続く。平面形は円形呈し、壁面は検出面から緩やかに傾斜し土坑底へといたる椀状をなす。規模は、残存長が156cmで、深さは45cmで、底面の海拔高は12.97mである。出土遺物はみられなかったものの、3層に分かれる埋土の色調からみて、中世以降の土坑と考えられる。

土坑4（第17・26図、図版3）

平面形が円形で、規模は長径が133cm、短径は118cmである。断面形は筒状をなし、深さが58cm、底面は平坦で海拔高は12.89mである。

底面には厚さ18cmの板材を据え、その上に厚さ1.5cmの板材を壁面に立てていた。埋土中からは礫のほかに出土遺物として備前焼播鉢6や図示していないが磁器の大皿片が出土している。周辺では土壙墓も見つかっており、早桶の可能性がある。時期は、江戸時代初頭と考えられる。



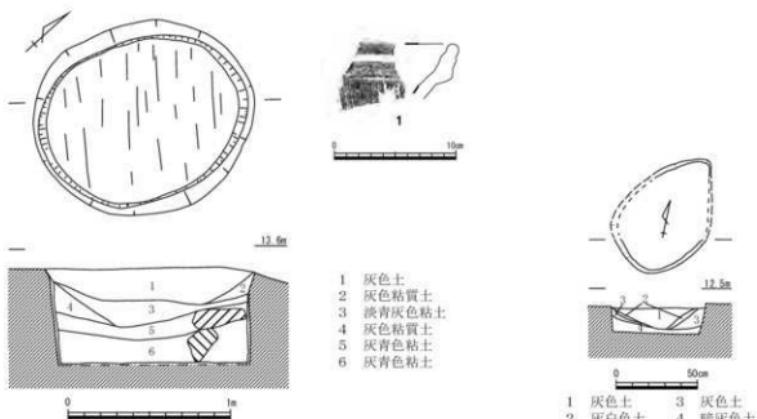
第25図 土坑3 (1/30)

土坑5 (第17・27図)

57区に位置する土坑で、平面形は、やや歪な橢円長方形を呈する。規模は、長辺が80cm、短辺は55cmほど、深さは18cmである。壁面はほぼ垂直に立ち、底面は平坦な面をなす。底面の海拔高は12.23mである。遺物は出土していないが、埋土の色調から中世以降と考えられる。

土坑6 (第17・28図、図版3)

56区に位置する。平面形は歪な方形を呈し、規模は長辺が112cm、短辺は100cmである。断面は浅い皿状をなし、深さは10cm、底面のレベルは12.72mである。時期を特定できる遺物はないが、埋土の色調から判断して中世以降と考えられる。



第26図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

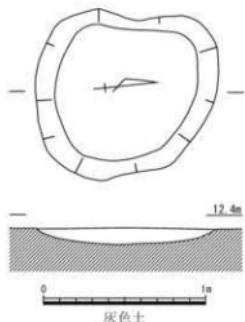
第27図 土坑5 (1/30)

土坑7 (第17・29図)

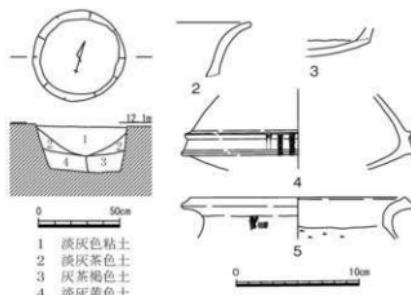
55区に位置する土坑で、平面形は直径が56cm程の円形を呈する。断面形は逆台形状をなし、深さは29.7cmで、底面の海拔高は11.8mである。柱穴程度の大きさであるが、周辺の遺構の大半が中世以降の柱穴であるのに対し、弥生時代に属するものは皆無に近いことから、土坑として扱った。

出土した遺物としては、弥生土器2～5がある。2・3は高杯の杯部片、4は脚付きの直口壺で、玉ねぎ状の体部に断面「M字状」の突帯をめぐらす。5は甕の口縁部片である。

これらからみてこの土坑の時期は、弥生時代後期IIと考えられる。



第28図 土坑6 (1/30)



第29図 土坑7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

4 溝

溝1 (第17・30図、図版4)

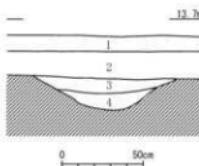
60区北端で検出した南北方向の溝であるが、南に行くほど浅く長さ3mの範囲で確認したにとどまる。北端での幅が90cm、深さは18cmである。出土遺物はみられなかったが、埋土の色調から判断して、溝の時期は中世以降と考えられる。

溝2 (第17・31図)

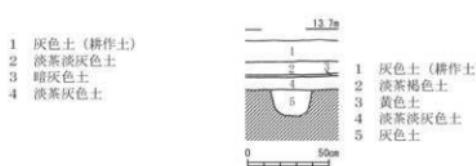
溝1から東に4m離れて平行に走る南北溝である。溝1同様、調査区の南々で途切れ、2mほどを確認したにすぎない。北端での溝の規模は、幅が25cm、深さは16cmほどである。溝1と同じく、時期は中世以降と考えておく。

溝3 (第17・32図、図版4)

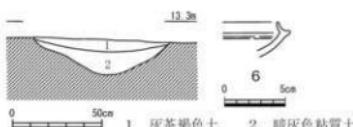
59区で検出した溝で、北西から南東方向に流れる。北西部より南東部がやや幅広になり、幅85cm、



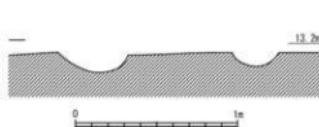
第30図 溝1断面 (1/30)



第31図 溝2断面 (1/30)



第32図 溝3断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第33図 溝4・5断面 (1/30)

深さは22cmである。出土遺物として須恵器の杯身6があり、それからみた溝の時期は、6世紀末頃と考えられる。

溝4・5（第17・33図、図版4）

58・59区で、溝3に併行し北西から南東に流走する。溝4は幅が30~40cm、深さが8cmほど、溝5は幅が20~55cm、深さは6cmである。溝4の埋土は褐色土、溝5の埋土は暗褐色土で埋まる。出土遺物は無いが、溝の時期は、古墳時代~古代を想定している。

溝6（第17・34図）

58・59に位置し、溝3~5と同様、北西から南東方向に流れる。幅が116cm、深さは16cmほどである。溝中からは、弥生土器が多数出土した。壺の口縁部片7~9、甕の口縁部片10、壺・甕の底部片11~13、高杯杯部片14、同脚部片15~16、壺もしくは鉢の脚部片17で、これらから見た溝の時期は、弥生時代後期Iと考えられる。

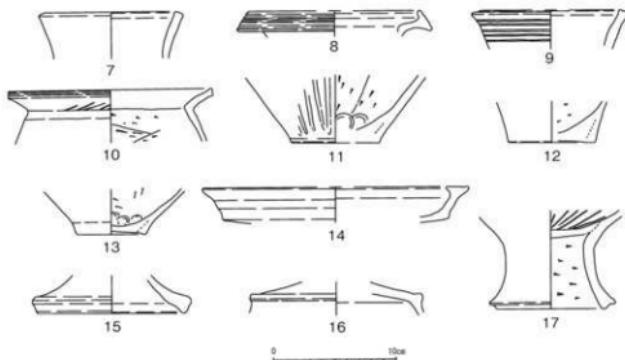
溝7（第17・35図）

溝6の東で検出した。溝6とほぼ並行するが、溝6を切っている。調査区北端あたりでは、さらに

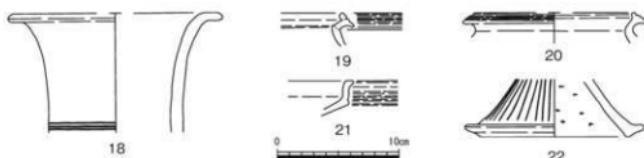
— 13.1m —

1 暗褐色土 (土器多含) 2 淡灰褐色土

2条の溝が北東方向に分岐する。埋土は、溝6の下層と同一である。出土遺物には、弥生土器の壺口縁部片18、甕口縁部片19・20、高杯口縁部20、同脚部21がある。以上の遺物から見たこの土坑の時期は、弥生時



第34図 溝6断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第35図 溝7断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)

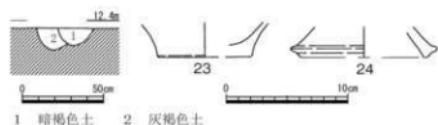
代後期Iである。

溝8（第17・36図、図版3）

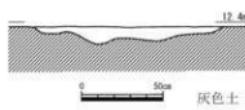
56区で北東から南西に流れる溝で、1回掘り直しが行われている。規模は、幅が20cm、深さが10～13cm程の溝である。弥生土器の壺底部片23、高杯脚部片24が出土しており、それからみた溝の時期は弥生時代後期Iと考えられる。

溝9（第17・37図）

溝8と直交する溝で、溝8に切られる。幅は115cmほどであるが、深さは10cm程度である。調査区北側では3条に分岐した溝が南側で合流し、1本の溝となっている。遺物はないが、溝8に先行する弥生時代の溝である。溝1～9以外の溝の時期は、古墳時代から古代と考えている。



第36図 溝8断面（1/30）・出土遺物（1/4）



第37図 溝9断面（1/30）

5 包含層出土の遺物（第38・39図）

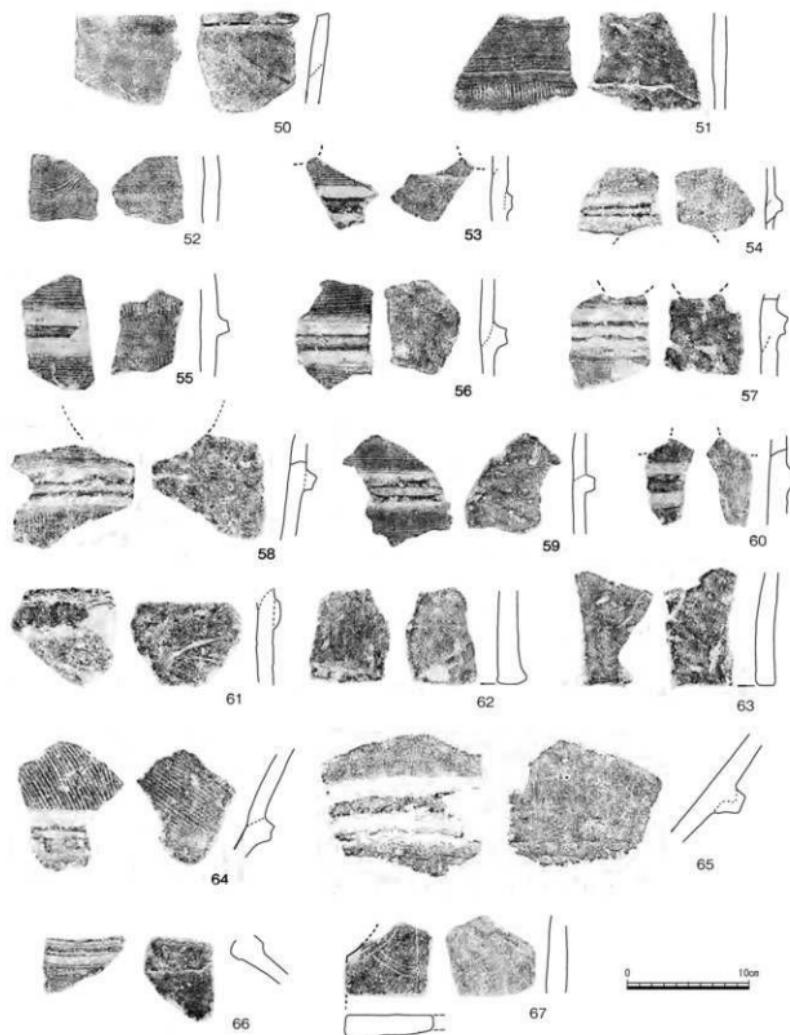
包含層からの出土や遺構に伴わない遺物として、弥生土器25～48、製塙土器49、埴輪50～67のほか、備前焼、唐津・伊万里などの陶磁器類がある。

25～30は壺の口縁部である。長頸壺25の口縁部は、わずかに外傾する円柱状の頸部をなす。口縁端部は上下に肥厚させ、端面に4条の凹線を巡らせる。頸部の外面調整は、ハケメである。26は口縁部から胴部にかけての破片で、壺ないしは鉢とみられる。27は広口短頸壺である。短く外反する口縁の端部は拡張し、端面には凹線3条を巡らせる。28～33は甕の口縁部である。短く外反する口縁端部を上下に拡張させ端面に3条の凹線を巡らせる28・29、端部を内側に強く拡張させて、3条の凹線を巡らせる30や端部を強くナデて終わる33、口縁端部を小さく拡張させ2条の凹線を巡らせる31と口縁端部を肥厚させない32がある。34～36は壺ないしは甕の底部である。外面にはヘラミガキを施し、内面にはヘラ削りを施す。鉢37は、短く外反する口縁の端部に凹線2条を巡らせる。39は小形の台付き壺ないしは鉢と思われ、脚裾部には円孔を穿っている。39～44は高杯の脚部である。小形の39と大形の40～43があるが、いずれも緩やかに拡がる脚裾の端部を肥厚させており、内側の一部で接地する。39では柱状部に6段の櫛描文を、裾部にはヘラガキ沈線文と10条ほどが一単位となる沈線文の間に1列で5～6個の竹管文を施している。41では脚端部に凹線を巡らせる。42では、裾部に小さな三角形の透かし孔がみられるが、内面に貫通はしない。脚端部には2条の凹線を巡らせる。エンタシス状の脚柱部40は、杯底部を円盤充填する。後述する44と同一個体の可能性が高い。44は装飾高杯の脚部であるが、いちどくびれてさらに裾が外側へと拡がる。くびれ部には突帶を配し、脚端近くを円孔で飾る。45～47は器台である。45は筒状の胴部の中央に長方形の透かしを穿ち、その上下をヘラガキ沈線で飾る。46・47はともに脚裾部で45と同様にヘラガキ沈線を施し、脚端部は肥厚させ内側の一部で接地する。48は小形鉢の脚部である。49は、製塙土器の脚部である。



第38図 包含層出土の土器 (1/4)

50~67は埴輪片である。50は口縁部片で、焼成は良好で須恵器質を呈する。外面調整のハケは、B種ヨコハケで、ストロークの間隔は短く、5.5cmである。山形のヘラ記号様の沈線がみられるが、



第39図 包含層出土の埴輪 (1/4)

2次調整の縦方向のハケ工具の圧痕によって沈線がやや不明瞭となっている。内面はナデ調整である。51は外面が6本/cmと粗いヨコハケである。内面のヨコナデも粗で、粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残っている。52は、2本の沈線で下弦の円弧を描いたヘラ記号がみられる個体で、外面調整はB b種ヨコハケで、ストロークの間隔は4cmと短い。53~60は突帶を含む破片である。突帶はいずれも比較的突出度が高く、台形ないしはM字状を呈する。また、焼成は堅致で、黒斑はみられない。透かし孔は58・59・61にみられ、いずれも円形である。55は、外面のヨコハケが5本/cmと粗い。内面はタテハケがみられるが、ハケメのち突帶貼り付けに対応したヨコナデを施す。58では、突帶下段の外面調整が1次調整のタテハケのみに対し、上段では2次調整のヨコハケがみられる。59は、B b種ヨコハケの静止痕が明瞭で、その間隔は2cmと非常に短い。62は最下段の破片であり、突帶は粘土紐の側面を器壁に押圧することによって貼り付けた「押圧技法」である。63・64は底部片で、外面はともにタテハケ調整のみである。64では残存高が9cmで、突帶貼り付けの痕跡は見られない。内面調整は、62がナナメハケで、63はナデである。64~66は、朝顔形埴輪で、口縁部片の64は内外面とも4本/cmの荒いハケを施す。胎土や色調などから同一個体であろう。頸部片65・66は、8~9本/cmのハケを内外面に施し、66では突帶側面にハケが認められる。上述した個体の突帶と比べて幅が厚く、突出度も高い。この遺跡における朝顔形埴輪の特徴であろうか。67は盾形埴輪もしくは蓋形埴輪の立飾りの破片で思われる。文様は2条1単位の弧線とやや弧状ないしは縦方向に直線で構成するが、裏面に文様はない。これら円筒埴輪は、いずれの無黒斑で、外面調整がB b種ヨコハケであることから、円筒埴輪編年図のIV期に位置づけられる。今回の調査区内には古墳の存在を示す周溝などの痕跡は認められなかったことから、これらの埴輪は隣接する森山古墳や廻山古墳に由来する可能性が高い。

第3節 まとめ

1 池新田遺跡・新屋敷遺跡の遺構と遺物

池新田遺跡と新屋敷遺跡は、弥生時代後期初頭、古墳時代前・後期、中世以降の三時期にまたがる集落遺跡である。調査範囲内の地形をみると（第1図）、森山古墳の前面が最も高くそこから東西へと下がり低位部となる。その森山古墳の前面部分においても遺構は古墳時代以降の溝が数条と土坑、柱穴が数基存在するのみで、東側の新屋敷遺跡との間には浅い谷が入るがその東斜面には遺構は存在しない。新屋敷遺跡の遺構面は、池新田遺跡の遺構検出面より約1m以上も低いが、弥生時代後期の豊穴住居（山陽自動車道調査区）や土坑等が存在し、調査区東端に近づくにつれ中世の掘立柱建物や柱穴群が認められた。弥生～古墳時代では、2遺跡とも、短期間でかつ小規模な集落と考えられる。

今回の調査地付近は、古代条里制地割の「高月条里」内に含まれる。今回の発掘調査では条里制にかかる遺構は確認できず、その施行時期は明らかにではないが、調査範囲にかかる小字地名をみてみると（第2図）、東から「七町田」、「新屋敷」、「八ヶ坪」、「池新田」、「九ノ坪」の順に並び、「新屋敷」以外はおよそ1町四方の方形地割が想定できる。このうち「池新田」、「新屋敷」は、江戸時代前期以降の新田開発によってもたらされた地名と考えられる。「池新田」地内では遺構はまったく確認できず、「新屋敷」地内においても建物、柱穴列、数基の土坑（時期は、近世を含む。）が確認できたが、「八ヶ坪」、「七町田」地区に比べ遺構はかなり希薄で、その中心は「七町田」地区にあった。つまり、

「池新田」・「新屋敷」は、延宝3年（1675）にはじまる砂川の改修と用水路の整備を契機として江戸時代中期以降に池等の低地を埋め立てて耕地化を図った小規模な村清新田ないしは町人請負新田で、その際に造成土の供給源として森山古墳や廻り山古墳の埴丘が利用されたと考えられよう。

条里制地割の基本単位である坪の並び（坪並）は、北西優位で南北方向に「一ノ坪」・「二ノ坪」…の順である。東優位で東から西へと「七町田」・「八ヶ坪」・「九ノ坪」の並びとなる高月条里の施行時期は、中世以降で江戸前期まで下る可能性がある。この東優位の原理とは条理地割設計の基準が砂川にあり、条里制地割の施行時期が砂川の改修工事と軌を一にする可能性もあろう。

2 出土埴輪について

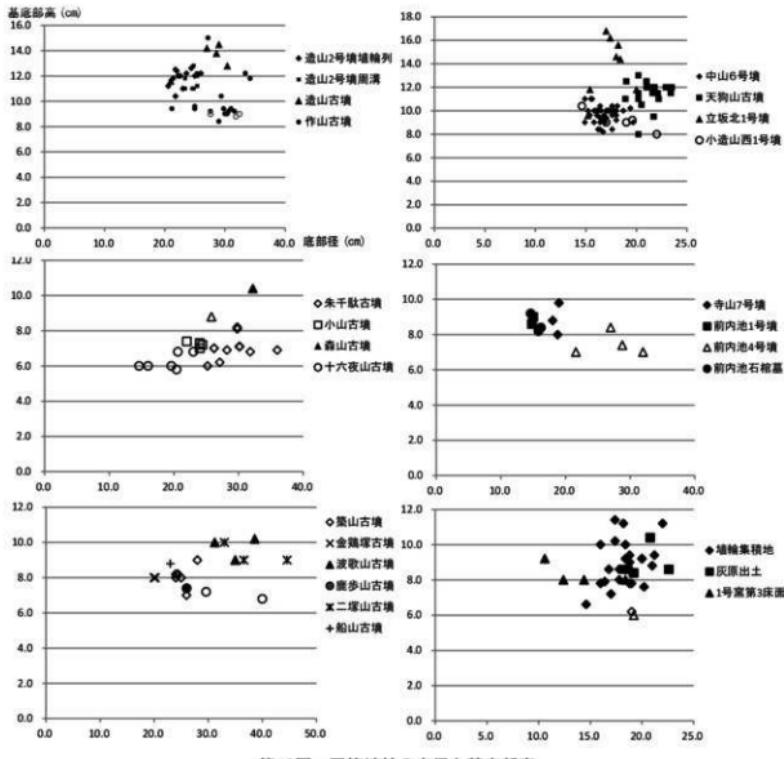
本書掲載の埴輪は、最下段の突帯に押圧技法がみられ、基底部の残存高が8～9cmを測る。外面調整は基底部が1次調整のタテハケのみを施すが、その他の格段の調整はB c種ヨコハケが主とみられ、突帯間幅も9～10cmである。基底部高や突帯間幅といったデータを比較するには資料が乏しいが、胎土・焼成も含め森山古墳の埴輪の可能性が強い。森山古墳出土の円筒埴輪^(注1)は、外面調整にB c・B d種ヨコハケがみられるが、基底部は多くがタテハケのみである。突帯間幅は9cm前後で、最下段突帯は通常の突帯と押圧技法の2種が存在する。出土埴輪は、5世紀後半から末の特徴を示し、出土須恵器から古墳の時期をTK23型式前後とする。朱千駄古墳の円筒埴輪^(注2)についても、全体像を伺える資料はないが、底部径からみて25cm前後の小型品と35cmを超える大型品が存在する。基底部高さは6.0～8.2cmの幅があるが、7cm未満が半数を超える。最下段の突帯はすべて押圧技法である。外面調整が一次調整のタテハケのみ、もしくは二次調整がB c・B d種である。突帯間幅は6.8～7.6cm、突帯割り付け技法の欠如が確認できた。小山古墳の埴輪^(注3)は、最下段の突帯が押圧技法をもち、基底部高さは7～7.4cmである。突帯間幅はほぼ7cmに収まることから、突帯の割り付けが行われている可能性が強い。外面調整は、ナデ、B d種ヨコハケないしはタテハケがみられる。

吉備地方の首長墓埴輪は、畿内中枢の大型前方後円墳と同様、時期が新しくなるにつれ基底部高さが減じる傾向がある（第40図）。これは押圧技法を持つ工人集団に顕著であり、吉備で同技法をもつ最古の作山古墳から基底部高を減じてゆく傾向が看取できる。備前地域では森山古墳、小山古墳、朱千駄古墳と吉井川上流域の首長墳である十六夜山古墳の各古墳の埴輪^(注4)はいずれも、基底部の突帯に押圧技法がみられる。その基底部の高さを比較すると（第40図）、これまで指摘されている、森山古墳→朱千駄古墳・小山古墳（小山古墳がわずかに後出）、ではなく、小山古墳が朱千駄古墳よりわずかに後出する可能性がある。ただし、この傾向も5世紀末まで6世紀代の古墳や6世紀後半と考えられる土井埴輪窯^(注6)では再び基底部高が高くなっていく。通常の突帯の埴輪では、寺山7号墳^(注7)（5世紀後半）以降、基底部高に大きな変化はなくなる。土井埴輪窯の場合は、複数の供給先が想定され、突帯数も4条突帯と5条突帯の2種が確認されていることが影響している。一方、備中地域の古墳の埴輪をみると、基底部高とその時期による変化が備前地域のそれと大きく異なるのは、備前地域の埴輪が4条突帯が中心であるのに対し、備中地域の埴輪が3条を基本とすることが影響しているとみられる。中山6号墳^(注8)（TK23）段階から立坂北1号墳^(注9)（TK47）へと基底部高は高さを増す。その中で押圧技法をもつ小造山西1号埴輪^(注10)がその変化から逸脱して基底部高を低く設定したことは、押圧技法を保有する工人集団の独自性を物語るのかもしれない。

註

- 「森山古墳 両宮山古墳」山陽町文化財調査報告第2集 山陽町教育委員会 2004
- 「朱千駄古墳」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告250 岡山県教育委員会 2019
- 「史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書」赤磐市文化財調査報告第2集 赤磐市教育委員会 2008
- 「十六夜山古墳」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130 岡山県教育委員会 1998
- 「前内池古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174 岡山県教育委員会 2003
- 「土井遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告191 岡山県教育委員会 2005
- 「寺山古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告118 岡山県教育委員会 1997
- 「中山古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 岡山県教育委員会 1993
- 「立坂北古墳群」「水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群」総社市埋蔵文化財発掘調査 報告9 総社市教育委員会 1991
- 「小造山西古墳群」「総社市埋蔵文化財発掘調査報告」17 総社市教育委員会 2004

第40図作成にあたっては、各発掘調査報告書のほか『岡山県史』考古資料編 岡山県 1986、『牛窓町史』資料編 II 牛窓町 1997、『長船町史』資料編上 長船町 1998、『邑久町史』考古編 邑久町 2006、草原孝典「岡山市所蔵の造山古墳の基礎的考察」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 2011を参考にした。



第40図 円筒埴輪の底径と基底部高

表2 池新田遺跡遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	備考
				口径	底径	器高		
1	土坑2	弥生土器	壺	14.0	—	—	浅黄橙色 (10YR8/3)	
2		弥生土器	甕	17.0	—	—	純黃橙色 (10YR7/3)	1/8残
3		弥生土器	垂腹甕	—	5.0	—	褐灰色 (5YR5/1)	
4		弥生土器	垂腹甕	—	4.0	—	純黃橙色 (10YR7/3)	1/3残
5		弥生土器	鉢	—	3.2~3.8	—	灰黃褐色 (10YR6/2)	
6		弥生土器	垂腹底部	—	4.0	—	浅黄橙色 (10YR8/3)	1/6残
7		弥生土器	高杯	—	—	—	棕色 (2.5YR6/1)	脚部1/4残
8		弥生土器	鉢	13.4	4.8	6.9	黑色 (2.5Y2/1)	1/11上1/8残、底部完
9		土師器	甕	14.8	—	—	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	1/5残
10		溝3	垂腹底部	—	5.6	—	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	底部1/4残
11	柱穴	弥生土器	壺・甕口縁部	13.2	—	—	棕色 (7.5YR7/6)	1/4残
12		弥生土器	甕	13.2	—	—	棕色 (7.5YR7/6)	1/6残
13		弥生土器	壺	—	5.4	—	純赤褐色 (10YR5/3)	1/2残
14		土師質土器	碗	11.2	3.8	3.8	灰白色 (10YR8/2)	1/11上1/2残、底部完
15		土師質土器	碗	11.4	4.4	3.1	灰白色 (10YR8/2)	1/4残
16	包合層	弥生土器	壺	—	—	—	棕色 (5YR6/6)	1/8残
17		弥生土器	壺	—	—	—	棕色 (7.5YR6/6)	1/6残
18		弥生土器	壺	—	—	—	浅黄橙色 (10YR8/4)	1/5残
19		弥生土器	壺	—	—	—	浅黄橙色 (10YR8/3)	1/6残
20		弥生土器	壺	—	—	—	棕色 (7.5YR6/6)	1/5残
21		弥生土器	壺	—	—	—	棕色 (5YR6/6)	1/5残
22		弥生土器	甕	23.8	—	—	明褐色 (7.5YR5/6)	1/8残
23		弥生土器	甕	20.0	—	—	黃棕色 (10YR7/3)	1/8残
24		弥生土器	甕	—	—	—	棕色 (5YR7/6)	1/6残
25		弥生土器	鉢	13.2	—	—	浅黄橙色 (10YR8/3)	1/4残
26		弥生土器	壺・費底部	—	12.8	—	棕色 (7.5YR6/6)	1/4残
27		弥生土器	壺・費底部	—	4.0	—	灰黃褐色 (10YR6/2)	底部ほぼ完
28		弥生土器	高杯	—	—	—	棕色 (2.5YR6/6)	1/4残
29		弥生土器	器台	—	—	—	棕色 (2.5YR6/6)	1/8残
30		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	灰白色 (5Y7/1)	
31		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	純黃粉色 (10YR6/4)	
32		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	灰色 (5Y6/1)	
33		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	灰色 (5Y6/1)	
34		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	灰白色 (2.5Y7/2)	残存部分32.4cm
35		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	黃灰白色 (2.5Y6/19)	ヘラ記号
36		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	灰色 (5Y6/1)	円形透かし
37		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	明黃褐色 (10YR7/6)	円形透かし
38		埴輪	円筒埴輪	—	—	—	純粉色 (7.5YR7/3)	
39		埴輪	円筒埴輪	36.8	—	(35.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	3条空巻、ハケ6本/cm
40		瓦	平瓦	—	—	—	純粉色 (7.5YR7/4)	
41		瓦	平瓦	—	—	—	灰黄色 (2.5Y7/2)	
42		瓦	丸瓦	—	—	—	浅黄橙色 (10YR8/4)	

表3 新屋敷遺跡遺物観察表

掲載番号	掲載遺物名	種別	器種	計測値(cm)			色調	備考
				口径	底径	器高		
1	土坑4	縦前焼	縦鉢	—	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	
2	土坑7	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR6/6)	
3	土坑7	弥生土器	脚付長鉢巻	—	—	—	灰褐色(5YR5/2)	
4	土坑7	弥生土器	脚付長鉢巻?	—	—	—	淡黄褐色(7.5YR8/4)	体部1/4残、最大径14.2cm
5	土坑7	弥生土器	甕	17.6	—	—	純黃褐色(10YR7/4)	口径1/4残
6	溝3	須恵器	杯身	14.0	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	口径1/8残
7	溝6	弥生土器	甕	10.8	—	—	純黃褐色(10YR7/4)	口径1/3残
8	溝6	弥生土器	甕	14.0	—	—	橙色(7.5YR7/6)	口径1/9残
9	溝6	弥生土器	甕	11.4	—	—	淡黄褐色(7.5YR8/4)	口径1/8残
10	溝6	弥生土器	甕	16.6	—	—	黃褐色(10YR7/4)	口径1/3残
11	溝6	弥生土器	甕・甕底部	—	—	—	純褐色(7.5YR5/3)	底部1/5残
12	溝6	弥生土器	甕・甕底部	—	6.8	—	褐色(5YR6/6)	底部1/4残
13	溝6	弥生土器	甕	—	5.4	—	純黃褐色(10YR7/3)	底部ぼんち
14	溝6	弥生土器	高杯	21.6	—	—	純褐色(5YR6/4)	口径1/8残
15	溝6	弥生土器	脚部	—	—	—	純赤褐色(5YR5/4)	口径1/8残
16	溝6	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR6/6)	
17	溝6	弥生土器	脚部	—	8.8	—	黃褐色(10YR7/4)	底部完
18	溝7	弥生土器	甕	16.8	—	—	淡黃褐色(7.5YR8/4)	口径1/8残
19	溝7	弥生土器	甕	—	—	—	純黃褐色(10YR7/4)	
20	溝7	弥生土器	甕	13.0	—	—	純黃褐色(7.5YR7/4)	口径1/8残
21	溝7	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	
22	溝7	弥生土器	高杯	—	12.0	—	褐色(7.5YR7/6)	底部1/6残
23	溝8	弥生土器	甕底部	—	7.2	—	純黃褐色(10YR7/3)	底部1/4残
24	溝8	弥生土器	高杯	—	10.0	—	浅黃褐色(10YR8/4)	底部1/8残
25	包含層	弥生土器	甕	18.4	—	—	橙色(5YR6/6)	口径1/4残
26	包含層	弥生土器	甕	14.0	—	—	純褐色(7.5YR7/4)	口径1/4残
27	包含層	弥生土器	甕	13.0	—	—	褐色(2.5YR6/6)	口径1/4残
28	包含層	弥生土器	甕	18.8	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	口径1/10残
29	包含層	弥生土器	甕	14.0	—	—	褐色(7.5YR6/6)	口径1/8残
30	包含層	弥生土器	甕	14.4	—	—	褐色(7.5YR6/6)	口径1/8残
31	包含層	弥生土器	甕	16.6	—	—	黃褐色(10YR5/3)	口径1/8残
32	包含層	弥生土器	甕	10.4	—	—	浅黃褐色(10YR8/4)	口径1/4残
33	包含層	弥生土器	甕	21.0	—	—	橙色(7.5YR6/6)	口径1/6残
34	包含層	弥生土器	甕・甕底部	—	7.8	—	純黃褐色(10YR7/2)	底部1/4残
35	包含層	弥生土器	甕・甕底部	—	6.4	—	褐色(7.5YR7/6)	底部1/2残
36	包含層	弥生土器	甕・甕底部	—	8.0	—	純黃褐色(10YR6/4)	底部1/4残
37	包含層	弥生土器	鉢	20.2	—	—	褐色(5YR6/6)	口径1/10残
38	包含層	弥生土器	脚部	—	9.8	—	褐色(7.5YR7/6)	口径1/8残
39	包含層	弥生土器	高杯	—	8.6	—	浅黃褐色(7.5YR8/4)	脚部ぼんち
40	包含層	弥生土器	高杯	—	—	—	灰白色(2.5Y8/2)	
41	包含層	弥生土器	高杯	—	16.6	—	純褐色(7.5YR7/4)	底部1/4残
42	包含層	弥生土器	高杯	—	13.6	—	褐色(7.5YR6/6)	底部1/6残
43	包含層	弥生土器	高杯	—	15.0	—	明褐色(5YR5/6)	底部1/6残
44	包含層	弥生土器	高杯	—	30.2	—	浅黃褐色(10YR8/3)	底部1/2残
45	包含層	弥生土器	蓋台	—	—	—	純褐色(7.5YR7/4)	口径1/4残
46	包含層	弥生土器	蓋台	—	18.8	—	褐色(7.5YR6/6)	底部1/6残
47	包含層	弥生土器	蓋台	—	18.4	—	褐色(5YR7/6)	底部1/6残
48	包含層	弥生土器	蓋塙土器	—	4.8	—	浅黃褐色(7.5YR8/4)	底部ぼんち
49	包含層	弥生土器	蓋塙土器	—	4.8	—	灰黃褐色(10YR7/4)	底部1/4残
50	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	黃褐色(2.5Y6/1)	口径
51	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	黃褐色(2.5Y6/1)	口径
52	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	灰色(N5/1)	ヘラ記号
53	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	純褐色(5YR6/4)	
54	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	純褐色(5YR6/4)	円形透
55	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	黃褐色(2.5Y6/1)	
56	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	黃灰色(2.5Y5/1)	ハサ4本/cm
57	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	明褐色(7.5YR7/2)	円形透
58	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	浅黃褐色(7.5YR8/4)	円形透。ハサ4本/cm
59	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	純褐色(5YR6/3)	
60	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	浅黃褐色(10YR8/4)	円形透
61	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	純黃褐色(10YR6/49)	押目直法
62	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	浅黃褐色(7.5YR8/6)	底部
63	包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	純褐色(5YR7/4)	底部
64	包含層	埴輪	朝顔形埴輪	—	—	—	浅黃褐色(10YR8/4)	ハサ4本/cm
65	包含層	埴輪	朝顔形埴輪	—	—	—	純褐色(7.5YR7/4)	
66	包含層	埴輪	朝顔形埴輪	—	—	—	褐色(7.5YR7/6)	
67	包含層	埴輪	蓋形埴輪	—	—	—	褐色(5YR6/6)	



1 土坑2
(東から)



2 土坑2、溝3・4
(東から)



3 溝1
(南から)

図版 2

新屋敷遺跡



1 挖立柱建物 1
(西から)



2 挖立柱建物 3
(西から)



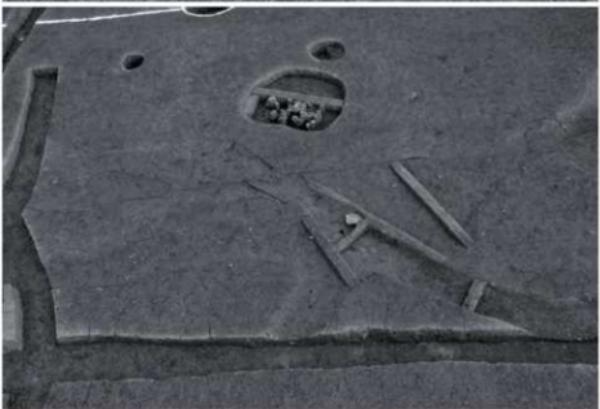
3 土坑 1
(東から)



1 調査区東側柱穴群
(東から)



2 土坑 4 (東から)



3 土坑 6、溝 8
(西から)

図版 4

新屋敷遺跡



1 溝1
(南から)



2 溝3~5
(東から)



3 溝7
(東から)

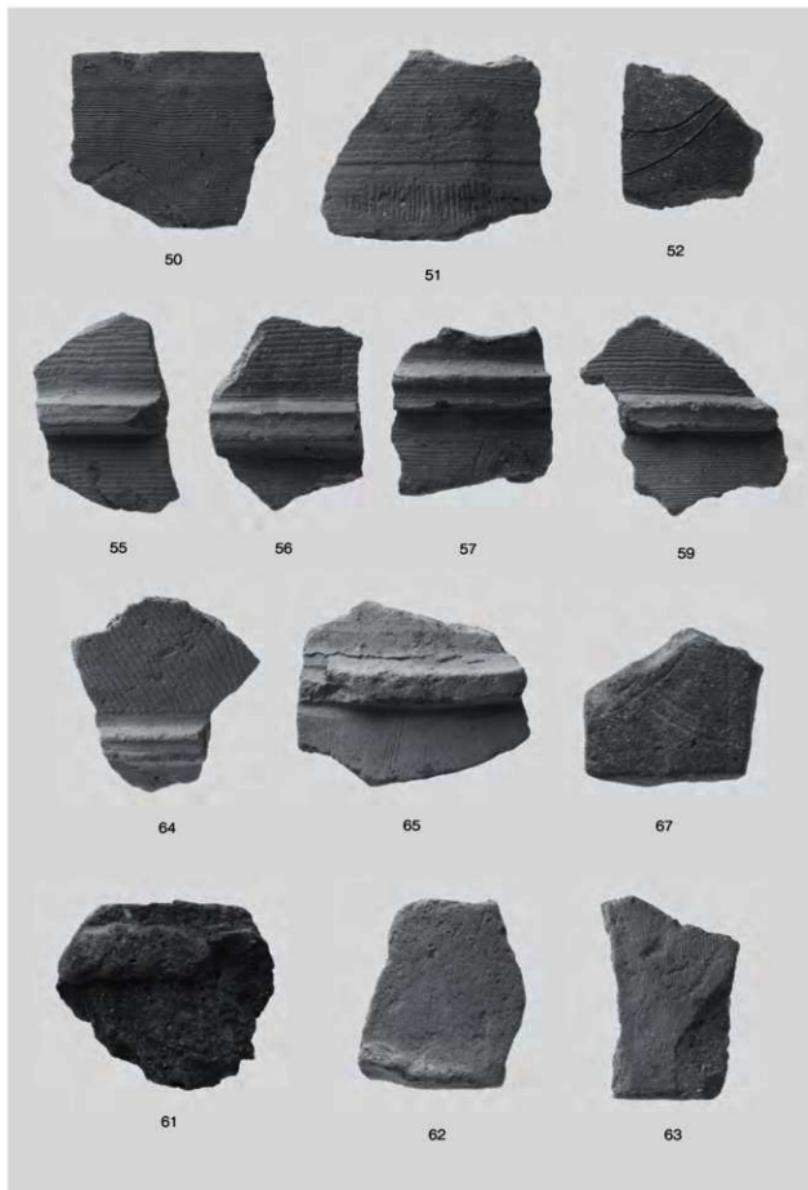


池新田遺跡出土土器・埴輪

図版 6



新屋敷遺跡出土土器



新屋敷遺跡出土埴輪

報告書抄録

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 252

池新田遺跡・新屋敷遺跡

県道岡山吉井線改良工事に伴う発掘調査

令和2年3月19日 印刷

令和2年3月19日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南1-1-5